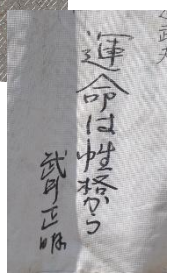
最後の夏に向けて

校　長　　武井　正明

土曜朝の新潟日報、部活の地域展開化の特集で、柳都中の近藤森先生が載っていた。彼は気配りとコミュニケーションの達人。会った瞬間に私は心を鷲摑みにされた。何を言っても笑いで返してくる大したヤツだ。

その近藤監督率いる鳥屋野 BC と YBC が今日の初戦で激突する。両チームの指揮官共に可愛い後輩だけに、人の縁と勝負の非情さを感じずにはいられない。



巻の城山球場、懐かしさが込み上げてくる。いつ以来かも思い出せない。球場もその周辺も随分整備された。ナイター設備が整い、スコアボードも電光掲示板になっている。

ふと第１試合を見ると聖籠の対戦相手は、かつての勤務校、栄中学校であった。

そしてスタンドには13年前新人大会で県準優勝した時に作ってもらった横断幕が掲げられてあるではないか!!　確かあの裏には当時のメンバーの言葉が書かれているはずだ。思わず行ってみた。

すると、あったあった。少し恥ずかしいが、やはり嬉しい。試合は強豪聖籠中に惜敗であったが、よく鍛えられた選手たちが躍動していた。当時のまま変わらぬデザイン、胸のオレンジ「Sakae」が懐かしかった。

そして第２試合 YBC 対鳥屋野 BC が始まった。先発の彼が威力十分のフォーシームとカットボールで力投するが、先制点からの次の１点が遠い。再三のピンチを凌いで迎えた５回裏、先発投手の彼が特大の一発をレフト柵越で高々と放り込んだ!!　それをリリーフの主将がピシャリと抑え、２－０で何とかものにした。

続く県四強を懸けた大一番、対聖籠戦。監督はベテラン名将の大江聡先生だ。

試合開始早々３－３取って取られての展開のなか先発の背番号 10 主将が５回まで粘った。そして互いに譲らず延長もよぎった７回表、無死２、３塁の大ピンチでセンターオーバー、走者一掃の三塁打を喫し、惜しくも３－６…悔しい敗戦となった。

残念ながらハマスタの夢は潰えた。夢は勝った聖籠に託す。YBC は気持ちを切り替えて最後の夏だ。今日浮かび上がった課題は、より確実な守備と打撃、そして更にもうひと磨きのパワー＆スピードと見た。

負けて泣けるのは若者の特権だ。思い切り泣いたら、次の一歩は早い方がいい。切り替えの早さも若さの特権だ。ぐずぐずなんかしていられない。青春は一瞬なのだから…。

今日の涙はカメラに収めない。撮るのは、君たちが勝って溢れる歓喜の涙だ。